平成23年1月15日号 第2号

伊勢のお白石持

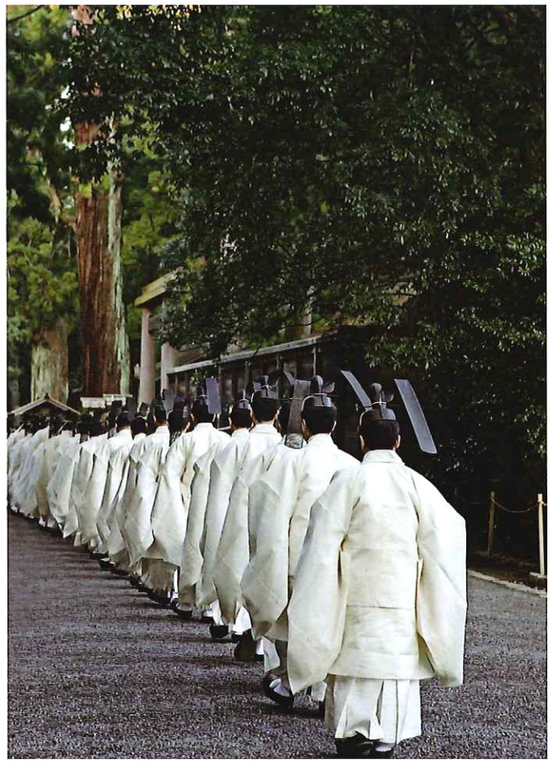
はじまりの姿、形の記憶、そして心を受け継いできた町

お伊勢さん。なんと響きのよい言葉でしょう。日本人が何代にもわたって憧れ、親しみを込めて呟いたお伊勢さん。幾重にも積み重ねられた神宮に対する素直な想いが、その一言に集約されている、そんな気がしてなりません。

伊勢には、天照大御神、豊受大御神をはじめ土や風、そして水をはじめとする多くの自然力が神として祭られ、人の思考を超越した自然の神秘のなかに存在しています。清浄であり、素でもある日本のはじまりの姿、形の記憶、そして心が連綿と受け継がれているのです。まさに日本がここに在る、といえるでしょう。

神宮杉に包まれた参道に歩を進めると、古代の人々と自分が、どこか記憶のなかにつながっているような思いさえします。

心の原風景といえばいいのでしょうか。自分のなかに棲む遺伝子がそう思わせるのでしょう。外宮内宮をはじめ、別宮や摂社末社を訪れると、その静謐な神域に「もの」や「こと」を超越した「空」の世界を知る瞬間があります。そのとき、人々はこの国の成り立ち、精神の根源に気づき始めるのでしょう。



清らかに流れるように滞りなく「清明浄直」の心で御奉仕が進められる神宮の祭典
写真提供／宮澤正明氏

日本人の精神性を伊勢神宮を通じて世界中に伝えたいと語る写真家宮澤正明氏

伊勢神宮には、神話が現存している、と語る写真家の宮澤正明氏。彼は「この聖なる神話をテーマに単なる記録としてではなく、人々の感性に直接呼びかけられるような写真表現を心掛け、実際に存在するものでなければ表現できない、最も現実的な表現手段である写真とは正反対の、最も空想的な神話の世界を写真に焼き付けることが私の使命だ」と常々思っているという。

そんな彼に、今回この広報誌に神宮を写した数多くの作品のなかから2点提供していただくとともにメッセージを寄せていただきましたのでご紹介します。

天照大神が五十鈴川の川上に鎮まられて二千年、御遷宮が行われるようになってから千三百年、自然と神と人とが共生し創造した世界は、まさに日本の美の原型である。美しき日本固有の伝統と文化は、二十年に一度の御遷宮という遥かなる営みによって時空を超え、現代まで存在し続けている生きる神話である。

第六十二回式年遷宮を平成二十五年に控え、現代の混沌とした世の中に一番必要不可欠な思い、「命を育む自然の恵みへの感謝、そして自然と共生してきた日本人の精神性」を、伊勢神宮を通じて世界中に伝えることの一端を担えれば幸いである。

これもひとえに伊勢とともに営んでこられた神領民といわれる地元の方々や、全国から伊勢神宮に心を寄せている方々の熱く美しく優しい気持ちに支えられたおかげで二千年という時を育んできたということを忘れてはいけないと思う。

日本人の精神性を伊勢神宮を通じて世界中に伝えることの一端を担う、という宮澤氏の言葉に、私たち伊勢人は、同じような気持ちで神宮の存在を捉えたいものだと考えます。

二十年に一度、社殿をはじめ御装束神宝をすべて新しくし、神様にお宮遷りいただく式年遷宮は、繰り返すことによってもたらされる永遠であり、それは神様の常若を願い、御神徳をいただき、国の弥栄と民の幸せ、そして命の連鎖を祈る行為であり、日本の心そのものなのです。

そこに日本の思想の根源があり、私たちの暮らしの原点、つまり日本人の精神性が存在するのだと考えます。

そのことを広く発信するためにも、いま間近に迫った「お白石奉献」という二十年に一度の伝統行事に対して、私たちは真摯に取り組むとともに、二十年先、四十年先を見て、更なる発展のための試金石として、今回のお白石持行事を成功裡にお納めしようではありませんか。

冬至、宇治橋の日の出。太陽の復活を祈るかのように、宇治橋の真ん中から朝日が昇ります。
写真提供／宮澤正明氏